

# 平家物語

## 祇園精舎

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。おごれる人も久しからず。唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の禄山、是等は皆、旧主先皇の政にもしたがはず、樂みをきはめ、諫をもおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらずして、民間の愁る所をしらざしかば、久しからずして、亡じにし者ども也。近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、此等はおごれる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、まぢかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝うけ給るこそ、心も詞も及ばれね。其先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。彼親王の御子、高視の王、無官無位にしてうせ給ぬ。其御子、高望の王の時、始て平の姓を給て、上総介になり給しより、忽に王氏を出て人臣につらなる。其子鎮守府將軍義茂、後には国香とあらたむ。国香より正盛にいたる迄、六代は、諸国の受領たりしかども、殿上の仙藉をばいまだゆるされず。

## 現代語訳

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く中国を思いやれば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の禄山（安禄山）らも旧主先皇の政治に従わず、樂しみをきわめ諫言も聞かず、天下の乱れも知らず、民衆の憂いも顧みないので亡びてしまった。我が国でも、承平の平将門、天慶の藤原純友、康和の源義親、平治の藤原信頼、これらはおごった心も武勇も皆さまざまであったが、最近では、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公という人の有様を聞くと、言葉にできないほどだ。その先祖は桓武天皇の第五の皇子。一品式部卿葛原親王の九代の子孫にあたる讃岐守正盛の子孫であり、刑部卿忠盛朝臣の嫡男である。かの親王の子、高視王は無官無位だった。その子高望王のとき初めて平の姓を賜って上総介になったが、すぐ皇族をはなれて人臣に連なった。その子の鎮守府將軍義茂、後に国香と名を改めた。国香から正盛までの六代の間は、諸国の受領であったが、宮中に昇殿を許されなかった。